

田辺の自然と自然史

―百万年前は海だったのか―

横山 卓雄

同志社田辺校地は丘陵地で、その頂部にはアカマツがたくさん生えている。その土地にはえる植物は、人の手が加わっていなければ地下の土壌や地質によって決まるはずである。はたして本当だろうか。また「昔京都盆地は古山城湖と呼ばれる大きな湖であった」という自然史のイメージが二十年ほど前に提唱された。本当に古山城湖があったのであろうか。

同志社大学田辺校地は、京都市の南方「山城」の中心部にある。地質学的には京都盆地と大阪平野（大阪構造盆地）の境となっている生駒山系の東麓に発達する丘陵地である。日本列島の地形は基本的には平

地・丘陵地・山地に区分できるが、それぞれの地形をつくっている地層や岩石の年代から考えると、段丘を含めて平地は現在からは二十万年前までのいわゆる「第四紀」後半の、丘陵地は約二十万年～五百万年前のいわゆる「鮮新更新世」の、そして山地は一千万年より古い時代の地層や岩石でできている。

「田辺校地」は、第四紀層のうちでも約百七十～百三十万年前にできた「淡水成層」でできている。これは一九七六～一九七八年に行われた「同志社大学校地学術調査委員会」の調査で明らかになったことで、その内容は同志社大学校地学術調査委員会発

行の調査資料№十三『同志社田辺校地及びその周辺の地質―南山城の自然史―』に詳しい。この調査のように地層を中心として地域の地質を調査すると種々の興味深いことがわかってくる。丘陵地であれば、いくつかのような状態でたまった地層か、地層をつくっている砂や礫はどこから流れてきたのか、これらの地層をつくっている砂や礫などは資源としてはどのような価値をもっているか、この丘陵地ではどんな災害がおこる可能性があるか、地下水は豊富か、温泉はでてくるか、どんな植物を植えたらよく育つかなどである。更にこうした一つ一つの事実を古い順に並べると、その地域の「自然史」を復元することができる。ここでは自然史を中心に、これらの話題の中からいくつかをひろって紹介してみよう。

一、田辺校地の植物相

アカマツの生えている丘陵の頂は、田辺礫層と呼ばれる礫層でできている。そのうえ高度も高いので土地の水分に対する保持力がすくなく、カラカラに乾燥していることが多い。アカマツ林が広がるのはそのせ

いである。アカマツ林にはソヨゴ・ネシギ・ヤマウルシ・モチツツジなども生えている。下草としてはコシダばかりである。

丘陵を削ってできている浅い谷の斜面の下の方や、丘陵の北斜面はほとんどコナラ林であり、コナラ以外にはヤマザクラ・クリ・アベマキなどとアカマツ林にはえてあるソヨゴ・ネシギ・モチツツジなども若干まじっている。これは地質学的には砂層の上であることが多い。この斜面の下、谷の底部にはハンノキ林が発達している。ハンノキは湿地を好むのでこういう分布をしているのだが、おもしろいことに傾いた粘土層の表面でおこった地すべり地では、尾根でもハンノキ林によく似た植生となることがある。ただ地すべり植生はハンノキ林にイヌツゲ・ウメモドキなどが多くはえているという特徴がある。こういう植生のところは地すべりが起きやすいと推定されるので注意を要する。このほかに特異な分布をするのが竹であり、ハチク・モウソウチクなどは粘土層の露出したところにだけ生えている。この丘陵では後でのべるように砂礫層の中に粘土層が三層はさまっている

のだが、その粘土層がやや傾いているので、その表面をそって地下水が流れている。この地下水を求めてタケが集まっている。そのため、タケの分布は丘にまいた「ハチマキ」のようになっていく。

ここへのべたことは、やはり同志社大学校地学術調査委員会による調査でわかったことであり、一九八一～一九八三年におこなわれ、一九八四年に『同志社田辺校地の植生と植物相―特に植生と土壌および地質との関連について―』（同志社大学校地学術調査委員会調査資料№十六）として発表されている。この調査結果でもっとも興味深いのは、丘陵をつくっている地層や地下水の状態とその上にはえている植物とが見事に関連していることである。

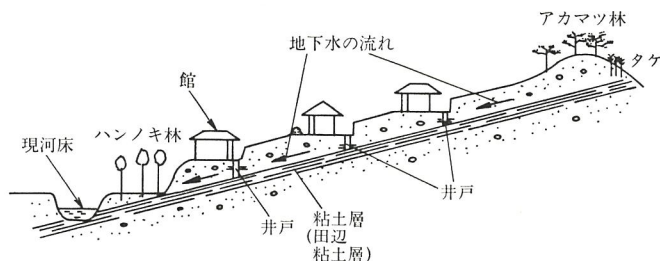
このことは、植物相をみれば地下の地層の状態を推定する手掛りになるばかりでなく、田辺校地にどんな植物をうえればよいかということを教えてくれる。今回田辺校地の開発にあたって、造園業者によって植林の実験が行われていて、高い費用を支払っているが、この学術調査はその十分の一以下の費用しかかからなかった。今後考え

ねばならないことだろう。

二、中世の遺跡と自然条件

田辺校地をつくる丘陵の南斜面は中世の城や館の遺跡の多いところである。第一図のように階段状に平地をつくり建物をたてている。こうした人工の平地の隅に井戸が掘られている。地下は殆ど砂礫層なのでそれほど深く井戸を掘らないと水がでるとは考えられないのだが、井戸は極めて浅い。面白いことにやはり粘土層の上を流れる地下水に向かって井戸が掘られている。この丘陵の南斜面の地下には後にのべるように田辺第三粘土層と呼ばれる数メートルの厚さの粘土層があり、斜面とはほぼ同じ傾斜で南へ低くなっていく。この上を地下水が流れているので、地表面から一～二メートル程度井戸を掘ると水が湧くのである。このように水が得やすく、南斜面で日あたりがよく、高度が高く見晴らしがよいという絶好の条件をそなえていたために、中世に城や館が多く建てられたのであろう。地下の粘土層がもしなかったら、この地に城も館も建てられなかったにちがいない。こうした

条件のよい土地を見つける昔の人々の知恵と探査能力に驚くばかりである。
この地下水は今も新宮社に湧き水としてでてきている。



第1図 田辺校地南斜面の地下

三、「古山城湖」と田辺丘陵について

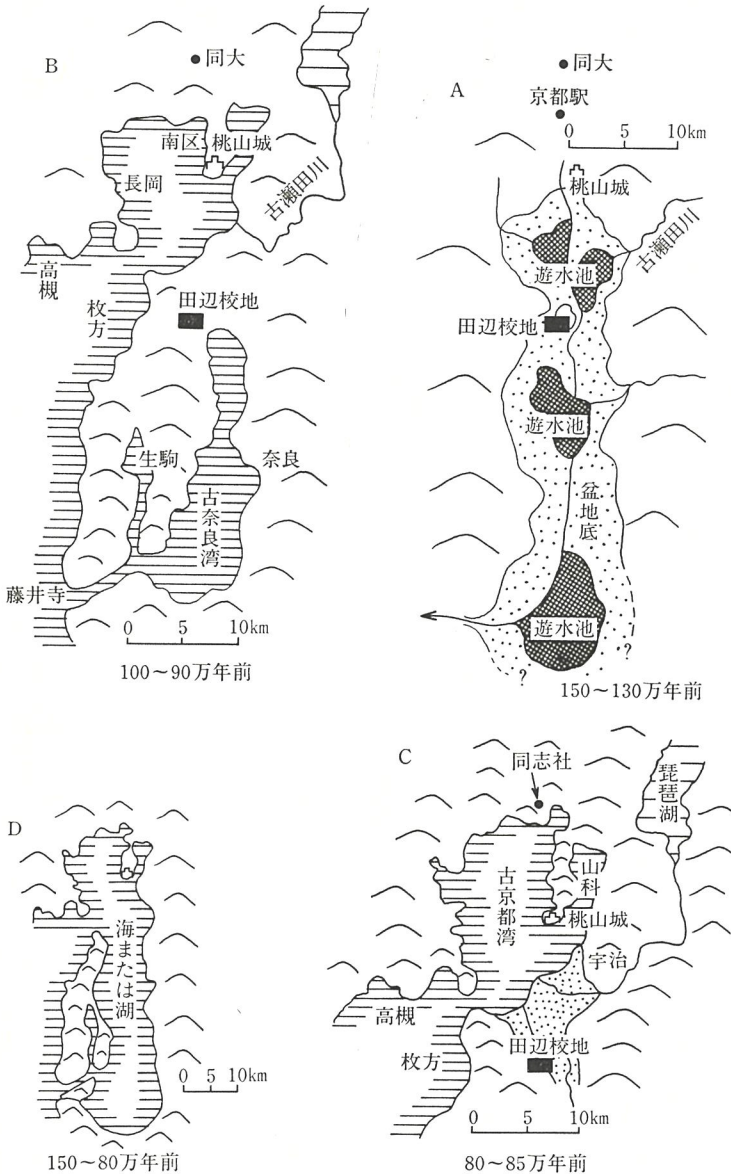
すでにのべたように「京都盆地は昔大きな湖であった。それがだんだん埋め立てられて小さくなり、その残りが巨椋池である」というイメージが語いつがれていた。

だが、このイメージは本質的には間違っているといつてよい。何故なら現在の巨椋池を掘ってみると十数メートルの厚さの新しい地層があり、その下に少なくとも百五十万年前の地層がでてくる。つまり、現在の巨椋池のある地域は、約百五十万年前から約十万年前までは陸地であつて、湖でも海でもなかったようなのである。「古山城湖」というイメージはもう死んでいる。これが信じられていた頃には、田辺校地は古山城湖の堆積物でできているといわれていたが、これもまた古い説である。現在の田辺丘陵には、約百メートルの厚さの地層がみられ、丘陵の頂部をつくっている田辺礫層をはじめとして基本的には砂礫層でできている。この間に顕著な粘土層が三枚みつかると、これを下のものから田辺第一、田辺第二、田辺第三粘土層と呼んでいる。第一粘土層の直下には二、三メートルの厚さの普

賢寺火山灰層が、第三粘土層の間には五十センチほどの厚さの同志社火山灰層がはさまれている。

古山城湖がなかったという証拠の一つに田辺礫層の存在と砂礫層から復元される古水流方向とがある。田辺礫層は礫の種類などから考えて、城陽市に分布する「城陽礫層」と同じ層である。城陽礫層は砂利取りの時の粘土洗浄による河川の水汚染やダンプの通行などで社会問題になっているが、礫はコンクリートの骨材として利用されている。上流の堆積物である城陽礫層は二百、三百メートルの厚さがあるのだが下流の田辺礫層は五十メートル以下である。少なくともこれらの礫層が堆積した時は城陽から田辺に向かって礫が東西または南西に流れてきたのであり、現在の木津川のような北西にむかって流れる川はなかったはずである。ましてその間に湖があれば、礫が田辺まで達することはありえない。

「古水流方向」というのは、地層をつくっている礫や砂を流してきた水の流れの方向である。城陽・田辺丘陵でこれを測定してみると、西、南西を向いていることが多



第2図 150万~80万年前の京都・奈良盆地の古地図図

く、礫や砂が城陽から田辺へと、東から西へと流れてきたことがうかがわれる。このこともまた、古山城湖の存在を否定している。

現在の第四紀学の知識をもとに当時の古地理図を描いてみることにしよう。「古地理図」というのは、たとえば百三十万年前から百万年前までのように、ある一定の時間幅をきめて、その間に湖や海になったところを表現したもので、時間幅が三十万年間というような大幅なものは、その間に水面が移動するので、描かれる湖が実際に存在していたものより大きくなってしまふ。

第二図に四つの古地理図を描いたが、Aは二十万年間、Bは十万年間、Cは約五万年間の時間幅である。たとえばAの最初からCの最後まで七十万年間を時間幅として描くとDのようにしまりのない図になってしまう。古地理図に表現される海や湖は、そのような水面が昔あったということではなく、いわば水面の軌跡である。この点は専門家以外の人々が誤解しやすいので注意が必要である。

「古山城湖」というイメージもこの時間

幅を五百万〜三百万という、とても大きく大きいものとすれば間違いとはいえないかもしれない。

四、「古京都湾」と「古奈良湾」

田辺丘陵の地層は、既述のべたように百七十万〜百三十万年前のものである。第二図Aに示したように、この時代にはまだ京都盆地はなく、現在の北山や岩倉のような状態であり、田辺から奈良にかけては所々に池や湖のような「遊水池」のある平地であった。城陽や木津には古い宇治川や木津川が扇状地をつくっていた。

その後、百三十万年前になると、奈良と枚方・八幡地域に海がはいつてくる。この海は大阪平野の大部分を覆い、現在の洞が峠と大和川に沿って京都・奈良盆地にはいつていた。それぞれを「古京都湾」「古奈良湾」と呼ぶことにしよう。田辺地域は海となることはなく古京都湾と古奈良湾をたちきる低い丘になっていた。古奈良湾は約八十万年前になると干上がってしまい、同時に現在の京都市外を中心が海となった。

この海に住んだカキの化石が蹴上の浄水場

の近くや、山科の東山トンネル出口、向日市の山麓などで見つかっている。そして、三十〜四十万年前には海が退き、京都・奈良盆地は低い丘陵地となってしまった。再び巨椋池がここに現われたのは約一万年以前である。

自然と自然史の話題は豊富で、私にとっては興味の対象であり、かつ生活の糧でもある。すべてを書くことはできない。書けばかきりがないのである。こうしたことに興味をもっていただけの方々は、また話しかけてくださるよう、お願いして筆を置くことにしたい。

(大学工学部教授)

古代・中世を中心に――

鈴木 重 治

一、歴史にみる地域性

柿がたわなに実った一九七八年の晩秋、田辺で「シンポジウム―南山城のくに―」が開かれた。

その中で、京都大学の上田正昭教授は、「古代の南山城における歴史には、水陸の道が重なって、この地域の文化をよりきわだったものになっている。和訶羅川・泉川ともよばれた木津川は、鴨川・桂川と合流して淀川となり、大阪湾につながる。そして、北陸路、近江路から南山城・大和への陸路、南山城から京都・丹波への道など、近江の大江、平城、平安、難波津道の古代

史の中に南山城が浮かびあがる。」と述べている。つまり、この地域を水・陸の要路としてとらえたことになる。

考古学の立場から発言した森浩一教授は、「この地域の前期や中期の古墳を生み出した力も、米の生産力だけでなく、交通・交易による富の集積も見逃せない。」とした上で、古墳時代の終末期、つまり七世紀末を前後とする初期寺院の造営数は多く、朝鮮からの渡来集団や南九州からの隼人系集団が、この地域の各地に勢力をのばしていることを重視した。

中世については、仲村研教授がとりわけ注目したのは、「山城の国一揆」とその

主体になるような地侍の動向である。一揆に参加した人々が、関所の廃止、つまり関銭の撤廃を要求の一つにしていることは、自由な通交を求めていることである。木津川の舟運を含めて、歴史上の交通体系の中での地域性をうかがわせている。

したがって、古代から中世にかけての歴史の中で、地理的環境がもたらした政治・経済・社会・文化への影響の大きさを、それぞれの専門の立場から指摘されたことになる。このようにして南山城の中の田辺をみると、歴史を動かした主体と地理的条件とのかわりが、問題となる。つまり、この地を歴史の舞台として歩んだ生き証人とも言うべき、遺跡・遺物などの考古資料や、記録・絵図などを含めた文献史料、さらに伝承などを手がかりとした過去の歴史事実との対話にも、さまざまな関心が呼びさまされることになる。

シンポジウムの中で、作家の金達寿氏は、「古事記」にふれて、仁徳帝が八田若郎女とねんごろになり、大后の石之日売が嫉妬した上で宮に帰らず、「暫し筒木の韓人、名は奴理能美の家に入りましき」の一

節をとりあげた。そして、筒木が綴喜であり、古代朝鮮の百濟から渡来した民族が、その筒木に古代朝鮮語のツツキ（岡の城＝山城を構えていたのである。」とした。ちなみに、古事記には、「奴理能美が養へる虫、一度は匍ふ虫になり、一度は鼓になり、一度は飛ぶ小鳥になりて三色に變る奇しき虫あり。」ともみえていて、このことから、同志社田辺校地に近い多々羅に、「日本最初之外国蚕飼育旧跡」という石碑が建てられたという。また多々羅氏族の祖神を祀ったとされる新宮社は、同志社田辺校地内にある下司古墳群に隣接していて、いまなお



堀切7号墳出土の顔面に入墨のある埴輪
（『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第3集より）

関係者によって手篤く祀られている。新宮社は、古代にあっては「今來の宮」、つまり新しく大陸から渡って来た人達の神を祀る社なのであろう。ここにも地域性の一端がうかがえる。

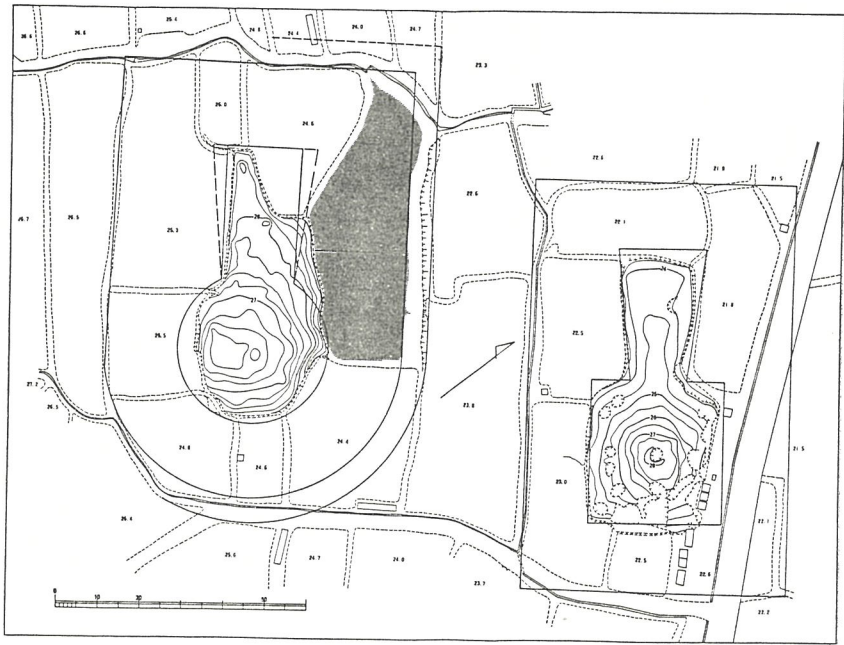
二、田辺の遺跡と遺物

田辺町内には、『田辺の文化財を学ぶ会』があつて、地域の歴史と文化遺産に関心をもち古老や、新しく田辺の住民になった人達が、遺跡を訪ねて現地で観察をしながら、共に考える場をもっている。ここ数年の間に、この会の人達と一緒に見て廻った

田辺町内の遺跡は数も多い。これらを通して、遺跡・遺物を概観して置こう。

田辺町内の旧石器時代や縄文時代の遺跡及びその候補地は、天王、三山木、飯岡などの地区でわずかに知られているのみであつて、発掘調査のおこなわれた例はない。遺物を一例だけあげると、三山木の山崎神社に保管されている縄文時代の男根をあらわした石棒は、京都府下でも稀な資料だけに、地域史を考える上でも貴重な資料といえよう。

弥生時代の遺跡では、学界にもっともよく知られているのが、同志社田辺校地内の『田辺天神山遺跡』である。中期から後期にかけての、典型的な高地性集落であり、土器、石器のほか鉄器や銅器も出土している。また竪穴住居址群の構成が、現地でみられる点でも、すぐれた教材ともなっていて、しばしば多くの見学者が訪れている。また、国鉄、大住駅の南側の丘陵地にある狼谷遺跡からは、弥生時代の代表的な石器である石包丁が多数発見されていて、規模の大きい集落が予想される。壺棺も出土したことがあり、発掘調査が期待される。



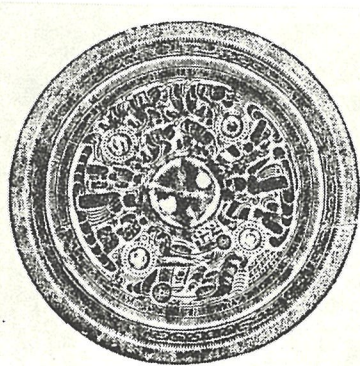
大住車塚（前方後方墳）と大住南塚（前方後円墳）（「南山城の前方後円墳」より）

なお、田辺城址の北側の一部で発見された鉄剣を副葬した台状墓と合口廻棺から成る弥生時代の墓地遺跡は、畿内一円の弥生時代の墓制を考える上で、きわめて貴重な遺跡であっただけに、町当局によって破壊されたのは遺憾であった。

古墳時代の遺跡では、飯岡古墳群、大住古墳群、興戸古墳群、下司古墳群、薪古墳群、松井横穴群などが、古くから知られて

いる。数年前の調査で、一休寺の近くの薪・堀切七号墳から発見された、顔面に直弧文の入墨のある人物埴輪は、この地域の代表的な埴輪であって、興戸古墳から出土した家形埴輪や、飯岡車塚から出土した円筒埴輪などと共に、南山城の古墳文化の一端を理解する上で、大きな手がかりを与えている。また、中央公民館の裏庭に保管されている薪穴六出土の家形石棺も見逃せない資料である。

奈良、平安時代の遺跡では、普賢寺址のほか、三山木麿寺、興戸麿寺などの寺院



飯岡トツカ出土の神人車馬画像鏡
(東京国立博物館保管)

址もあるが、とりわけて重視してよいのは、マムシ谷窯址と松井窯址であろう。前者は同志社校田辺地内から、後者は、大阪府との境に近い山中の、大住駅と長尾駅の中間あたりから発見されている。ともに須恵器を焼成した生産遺跡である。出土資料からみると、マムシ谷窯からは八世紀の前半、つまり奈良時代に普賢寺などの近辺へ製品を供給し、松井窯からは、長岡京造営時に、坏、皿、壺、甕、硯などを長岡京へ供給したと考えられる。古墳時代の後半に開始された田辺での須恵器生産の発展状況や、生産と消費の関係を、出土資料に即して考える上でも、きわだって良好な遺跡といえよう。

なお、この時代の仏教美術については、普賢寺大御堂の十一面観音像が、天平の仏として国宝、三山木駅の東側の寿宝寺の千手観音像が藤原期の作として重要文化財に指定されている。

中世についてみると、「今昔物語」に登場する神奈比寺の聖人にまつわる説話の甘奈備寺や、一休寺酬恩庵などの寺院もあるが、今年で丁度五〇〇周年を迎えた、山城

国一揆。前後の城館も忘れられない遺跡である。

中世の山城は、江戸時代の城と違って、天守閣や高く積まれた石垣などが無いため、見ばえのする遺構ではないが、戦略上の立地条件や、個性的な土塁や堀などに見るべきものが多い。

天王の畑城は、南北朝期の山城の典型であって、この地に立つと、南山城のみでなく、大和や河内、摂津なども見渡すことができる。まさに戦略拠点である。この城址から普賢寺谷を降りてくると、後補されているとはいえ、正長元年戊申歳（一二二八）の紀年をもつ「興福寺別院山城國縁喜郡観心山普賢教法寺四至内之図」つまり普賢寺



旧普賢寺の領域図；この絵図の右半分が同志社田辺校地に相当する（原図は観音寺保管）



『重要文化財』寿宝寺の千手観音像（平安時代後期）

の領域図に描かれている多くの城館の配列が、道の両側にうかがえる。このうちの一つが、同志社田辺校地内遺跡群のL0c3と呼ばれた普賢寺殿の館であり、土塁を含めて旧状のまま保存されている。絵図によると、普賢寺殿のほか大西殿、城殿など「殿」と呼ばれる館には堀や土塁が描かれ

ていて、まさに地侍の館である。普賢寺川の下流域にある草内城も、草内殿の館であって、重要文化財の十三重の石塔がある法泉寺の南側に、堀に囲まれた館跡として残っている。これらが山城国一揆とそれ以後の地侍にかかわる遺跡のうちの主要なものである。

三、古代・中世の指定文化財

田辺町内にある国指定文化財のうち、さきにあげた以外で、中世以前のものは次の通りである。

重要文化財 佐牙神社本殿（鎌倉時代）、
酬恩庵本堂（室町時代）、一休和尚画像（室町時代）、一休和尚座像（室町時代）、白山神社本殿（室町時代）

なお、考古学上の遺跡で、史跡に指定されているのは、大住車塚のみであり、飯岡古墳群をはじめとして、考古学史上重要な遺跡については、史跡公園として保存した上で、整備されることを願っている。田辺町の住民憲章の一項目には、「私たちは、郷土の歴史を知り文化遺産を守りましよう。」とある。田辺町指定文化財は『単人舞』と『すいきみこし』の二件のみであり、古代・中世の指定物件はない。すでに触れたように田辺町内にも多くの文化財があるのだから、文化遺産を後世に残すためにも、田辺町の行政努力を大いに期待したいものである。

―近世から近代へ―

沖 田 行 司

明治と改元されて初めての正月を迎えた、未だ屠蘇気分醒めやらぬ頃、四人の侍が木津川を渡り、大住から普賢寺村へと急いでいた。これより少し前の一八六八（明治二年一月五日に、寺町丸太町を少し下がったところで一人の思想家が刺客の凶刀にたおれた。横井小楠の最期である。小楠といえば、尊皇攘夷の運動が世の中を席捲していた時に、地上から戦争をなくすためにアメリカと国交を結ぶという、国際平和の実現のための開国を主張した人物として知られている。また、刺客が懐中していた斬奸状に「今般夷賊に同心し、天主教を海内に蔓延せしめんとす。邪教蔓いたし候

せつは、皇国は外夷の有と相成り候こと顯然なり」とある。キリスト教の受容については否定的であったが、小楠がキリスト教に深い関心を示し、高く評価したことは事実である。小楠が熊本に蒔いた種子はやがて熊本バンドを生み出し、そしてこの熊本バンドの人々が後に同志社の発展を担う一大勢力となったことは周知の通りである。

さて、小楠の暗殺に加わった四人の侍は、普賢寺の田宮家に数日の間逗留した後、追手を察知して高野山方面に逃亡したが、ほどなく捕縛された。この事件に連座して田宮家の当主貞清は閉門の上、お預けの処罰を受けている。この田宮家をはじめ

め、田辺の有力者の幾人かが同志社の義捐金名簿に名を連ねている。かくして、小楠を媒介として田辺と同志社との間に奇しき因縁が結ばれるのである。しかし、刺客が田辺へ逃げ込んだのは偶然ではない。田宮家当主の実弟武臣が熊本藩の支藩の丸岡藩の藩士である仲嶋家の養子となっており、この人物が刺客と同志の関係にあったといわれている。また、刺客の中には十津川郷士の者がいたことから、後に述べる南山郷士の田宮家との間に相い通じるものがあったのかも知れない。

南山郷士の話にはいる前に、近世の田辺の領地支配の特質に触れておきたい。徳川幕藩体制が親藩・譜代・外様からなる諸大名を巧みに全国に配置し、相互に牽制させながら対抗勢力の存在を排除するものであったことは周知の通りである。こうした政策は全国に貫徹しており、とりわけ京都近郊においては朝廷対策ともあいまって、より複雑な様相を呈していた。田辺の総石高は約一二、二四〇石であるが、これらは淀藩、会津藩、禁裏御料、幕府領それに社寺領等の十六の所領に分割されていた。この

内で、淀藩の所領が最大で、約五、四三三石である。しかし、これにしても最大一、七六石から最少十三石にいたるまで、田辺の十一カ所に散在している。このように、多くの所領が入り混った結果、そこから生じる弊害もすくなくはなかった。たとえば豊田武兵衛にまつわる悲話もその一つである。

田辺の東南に飯岡という小高い丘陵地がある集落がある。木津川沿いにもかかわらず早魃と洪水に悩まされていたところ、一七六三(宝暦十三年)、用・排水の工事に着手する人物があらわれた。豊田武兵衛である。十年の歳月をかけて大岩石を掘り進み、難工事の末、二四〇メートルの「万年樋」を完成させ、余すところあと少しというところで豊田家の私財は底をついた。追いつけかけのように、闕所追放という処分を受け、一家離散という不幸にみまわれた。讒言によってである。というのは、この工事は淀藩の領地と幕府の儒官である林大学頭の領地にまたがるものであり、しかも両所領は年来争いが絶えなかったところから、武兵衛の事業は正当な評価を受ける

ことなく、政治的に処理されてしまったのである。その後、用・排水は村民の手で完成され、また闕所追放の罪も赦されたが、八幡山山の伝法院に身を隠した武兵衛は、帰村を願う村人の幾度かの訪問にもかかわらず、頑として応ぜず、一七九四(寛政六)年に七十九歳の生涯を閉じた。三山木駅から西にむかい、玉水橋の手前を木津川の流に沿って堤防を少し下ると「用水発起豊田翁之碑」がたっている。一八三二(天保三)年に武兵衛を追慕して建立されたという。以上のような田辺の所領の構造から、田辺全体を左右する主要勢力というものが成長する条件は極めて乏しい状態にあった。しかしこうした中で、田辺のオピニオンリーダーの役割を果たしたのが南山郷士である。

小楠を暗殺した刺客が逗留した田宮家が南山郷士と呼ばれる出自を持っていることは先に触れたが、普賢寺にはこの他にも南山郷士の出自を持つ家がいくつかある。南山郷士とは後醍醐天皇に仕え、笠置行宮の召に応じて参集し、功をなした南山城地方の郷士である。近世後期から幕末にかけ

て、郷士と呼ばれる階層から多くの才能豊かな人物が輩出したことは歴史の証明するところであるが、田辺においてもこの南山郷士から多才な人物が出ている。蘭学者藤林普山もそうした一人である。普山は一七八一(天明元)年に普賢寺で生まれた。幼少期にどのような教育を受けたか不明である。明治四十一年に編纂された『山城綴喜郡誌』には、普賢寺村の寺子屋が紹介されている。寺子屋は商品経済の発展とともに登場してきた庶民の教育施設であり、主として読・書・算を中心とした庶民の生活に必要な知識を教授する場であった。普山が生まれた天明期頃になるとほぼ全国的に見られるようになる。普賢寺の寺子屋の通学年齢は八歳から十二歳で、教科目は習字と読書に分かれていて、習字の文本として、いろは、片仮名イロハ、請取、送り状、名頭、国尽、商売往来、百姓往来があげられている。特に、『商売往来』と『百姓往来』が併せて用いられていることは、農業知識と商業知識の両方を必要とするような環境に田辺が位置していたことを示すものとして興味深いものがある。また、読書の教科

書としては、実語教、童子教、今川状、腰越状、義経状、経盛状、弁慶状、庭訓往来、成敗式目、四書などがあげられている。これらの教科書類からみる限り、普賢寺村の寺子屋はかなり充実した高度な内容をもつものであったことがわかる。恐らく普山もこうしたところで基礎的な教育を受けたのであろう。一七九六(寛政八)年、十六歳の時に京都に出て医学を学んでいる。

そこで普山は、当時非常に入手が困難であった日本最初の蘭和辞典である稻村三伯の『波留麻和解』を手に入れている。三年間京都に滞在した後、普賢寺へもどり、その後十年あまり普山は独学で蘭学研究に打ち込んでいる。一八〇九(文化六)年、普山は京都に出て医業を開くのであるが、丁度その頃、江戸を逐われた稻村三伯が海上随鷗と変名して京都に滞在していた。一八一(文化八)年に三伯が没するまでの二年間、普山はその門に入り、蘭学研究に従事した。普山は師の三伯の『波留麻和解』を修正・補足した『訳鍵』や『和蘭語法解』などの蘭学研究に不可欠な書物や、『西医今日方』、『西医方選』などの医学書を残し

て、一八三六(天保七)年に五十六歳で世を去った。幕末期の蘭学研究が富国強兵のための、いわゆる官制の学問としての性格を強めて行く中で、師の三伯が普山を「山中に潜居して、静かに喝蘭の医籍を読み、且つ攻め、且つ治する」と評したように、草深い普賢寺の里での普山の蘭学研究は、学問発展史の上においても大きな意義を持つものといえよう。

こうした歴史の蓄積の上に、田辺の近代が始まるのである。維新直後、未だ戦塵の止まざる頃、三山木の南山駒が谷に南山士文武練習所が開設された。新しい時代の到来を予感した政治的意識の覚醒である。中等・高等教育が少数のエリートを除いて一般民衆にはほとんど閉ざされた状況にあって、こうした意識の覚醒は私塾という形態の学校創設運動を促した。一八七七(明治十)年には壺管家塾が棚倉孫神社内に設けられた。壺管というのは、朋友の集合を意味する。ここからも、勉学意欲に燃えた青年達の姿が想い描けよう。壺管家塾は、一八八一(明治十四)年に南山義塾と名称をかえ、地元の篤志家による出資などの基金

を得て、さらに充実したものへと発展した。翌明治十五年には同志社田辺校地の近くの普賢寺川に沿って、寄宿舎を備えた新校舎が完成した。また、これよりも少し前の明治十三年には大住村にも愛民義塾という私塾が地元の篤志家の手で設立されている。新島襄は南山義塾の創設に際して「祝言」を寄せるなど、こうした私塾の発展に大きな期待を寄せた。新島は学問の中央集権化を批判し、「義塾ヲ起シ、往々之ヲ米国ノコレレジノ如キ者トナシ、広ク学ヒタル人ヲ養成」するという「地方教育論」を主張していたが、南山義塾や愛民義塾こそ、新島をして「自由民権ノ養成所ハ此ノコレジニアリ、此義塾ノ挙ナクンバ如何シテ国の勢力ヲ養ヒ得ベキゾ」と言わしめるにふさわしいものであった。しかし、自由民権運動への弾圧とその衰退、および官公立学校を中心とした学校教育の再編の過程で、こうした私塾は姿を消して行くのであった。田辺移転に際し、こうした田辺の歴史を継承し、発展させることこそ、同志社に与えられている大きな課題であるといえよう。

(大文学部助教授)